

「悪の道から立ち帰る」

凶悪事件が起こると決まって「厳罰化」が話題になります。曰く、「もっと厳しくすれば実行を躊躇するはずだ」。確かに一理ある。一方で、厳罰化して思いとどまる者は、厳罰化しなくても思いとどまるのではないかとも思います。極論を言えば、自ら極刑を望む者がことを起こすハードルを下げてしまうのではないかと。とも。罰、制裁を与えることは、別の一面から見ればやはり「暴力」であるといえるでしょう。そして、暴力は暴力しか生みません。

神はエレミヤに「巻物を取り、わたしがヨシヤの時代から今日に至るまで、イスラエルとユダ、および諸国について、あなたに語ってきた言葉を残らず書き記しなさい」（エレミヤ書 36:2）と命じられます。この時、神はいわば厳罰化によって民をコントロールしようとしているように見えます。「ユダの家は、わたしがくだそうと考えているすべての災いを聞いて」（エレミヤ書 36:3）という言葉からは、これまで神が人々に対して与えてきた罰を思い起こさせるようにという意図が見えるのです。

確かに神はその道をまっすぐするために暴力を厭わない方でした。例えば、「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」（創世記 6:5-6）ので、大洪水を引き起こして世界を一掃された（「地の面にいた生き物はすべて、人をはじめ、家畜、這うもの、空の鳥に至るまでぬぐい去られた。」創世記 7:23）。

しかし、残念ながら暴力では解決しませんでした。事実、エレミヤの生きたこの時代にあっても人々は「悪の道」＝神を神としない、自分をその中心に置く生き方を選ぶ者が多かったのです。また、この時からずいぶん時間が経ったイエスの時代にあっても、「こうして、あなたたちは、受け継いだ言い伝えて神の言葉を無にしている。また、これと同じようなことをたくさん行っている」（マルコによる福音書 7:13）と言われるように、やはり「悪の道」に逸れていく者がたくさんいたのです。

それでも神は、人々が神に立ち帰ることを諦めておられません。だから、語られた言葉を書き記させ、バルクに読み上げさせられたのです（「ネリヤの子バルクは、……巻物に記された主の言葉を主の神殿で読んだ。」エレミヤ書 36:8）。直接的な暴力ではなく、言葉を聞いて悔い改めるようにと呼びかけられたのです。人々が十字架につけるとわかっていながら、独り子イエスをこの世界に与えられたのです。

そして、暴力をもって人を救うのではなく、愛と寛容をもってこの世界を救うと思い直されました。だからイエスは決して暴力で相手を屈服させようとはされません。自らを逮捕しに来た人々を追い払おうとした者をいさめられます（「イエスは言われた。『剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。』」マタイによる福音書 26:52）。

「だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります」（テモテへの手紙二 4:3-4）。パウロはそう言って、神の言葉に誰も耳を傾けない時が来ることを予想しています。もしかしたらその数百年前、エレミヤの前にいた人々も同様だったのでしょうか。神の言葉を聞こうとせず、めいめい自分勝手に生きようとしていました。それでもエレミヤは諦めずに神の言葉を語り続けました。「人々が主に憐れみを乞い、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない」（エレミヤ書 36:7）と期待しながら、語ることを止めませんでした。

それは、「主の律法は完全で、魂を生き返らせ／主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える」（詩編 19:8）と確信していたからでしょう。そしてその姿は、パウロが「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです」（テモテへの手紙二 4:2）と勧めた生き方そのものだったと言えるでしょう。

今、私たちを取り巻く社会もまた、「それぞれ悪の道」を歩んでいるのかもしれませんが、「だれも健全な教えを聞こうとしない」時代なのかもしれません。それでも、私たちは厳罰化によって相手を屈服させるのではなく、エレミヤのように、パウロのように、愛と寛容による救いを伝えていきたいと願います。その救いのしるしが来られるクリスマスは着実に近づいているのですから。

